とある健全で不健全な恋愛事情とその幸福な結末。

メリィ山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある健全で不健全な恋愛事情とその幸福な結末。

【Ｎコード】
Ｎ８９９５Ｔ

【作者名】
メリィ山田

【あらすじ】
あるひとは、ただ一人の人だけを盲目的に愛し、あるひとは、憎まれることに狂喜する。どこか歪んだ兄妹と、ふたりを愛し見守る少年と少女と、その幸福な結末について。

純粋で、盲目な（前書き）

甘いというには、苦味が強すぎる、そんなお話です。
幸福な結末、ハッピーエンドです。

純粋で、盲目な

分かってる。わたしはどうにかしているのだ。
ああ、狂ってしまいそう。
こんなにも、千鶴が愛おしいなんて。

わたし達は小学校の頃からずっと一緒にいた。
千鶴は誰に対しても優しくて、少々おっとりしていて、けれども自分の言いたいことはちゃんと主張できるような、強くて可愛い女の子だ。千鶴と一緒にいると家であった嫌なことも全部忘れることが出来た。いつもわたしを見ようとせずに、お互いの責任をなすりつけてばかりいる彼らなんかより、よっぽど、たいせつだった。わたしを見てくれる、唯一のひと。親友、いや、そんな簡単な言葉で片付けられやしない、千鶴は世界で一番の人。わたしの全てだ。
……決して、こんな汚らしい感情で汚されるべき存在ではない。
千鶴を見ると目眩がする、動悸がする、心臓はすくみ上がって、鳥肌が立って、下腹部がきゅうっと締め付けられて、喉はからからになる。手に汗をかくしで、うかつに手も握ることができない。
あの子にとっては、わたしはクールで頼りになる、佳月ちゃん、じゃなきゃならない。こんなに余裕がないなんて、千鶴に触りたくて堪らない欲望をいつか本人に気付かれてしまうのではないのかと、たまらなく怖かった。

わたしは昔から、どこか人と違うところがあった。
子供なら普通は大人に甘えるものだろうけど、わたしはそれをしなかった。できなかった。どうにも大人は信用ならんとでも思

っていたのかもしれない。小学校に上がる頃からはさすがにこれから生きていくためにはこのままではいけないのかもと薄々感じ取って、無視をすることはなくなったけれど、周りと距離を置いて観察する事の方が最も有意義なことのように思えた。今でもそれは変わらない。

楽しいと、笑うことが理解できない。悲しいと、泣くことが理解できない。たぶん、人間として一番大事な部分を母の腹の中に置き忘れてしまったのだ。

周りの大人、実の母であるはずのひとさえ、わたしをかわいげのない子供だと称した。

千鶴だけが違った。千鶴は可愛い。千鶴はわたしを優しく包み込んでくれる。下らないと思う世界も、彼女が視界に入るだけで虹色に輝いた。彼女はわたしの色のない世界の中で唯一光り続けるただひとりのひとだった。

今、わたしの目の前に横たわった千鶴。おかしいかな、彼女のふっくらとしたピンク色の唇や柔らかな産毛に覆われたまろやかな頬、襟の隙間からのぞく白い肌とくっきりと浮かぶ上がった鎖骨の隙間の影がわたしの心をかき乱した。

息切れがする。どうしよう、ダメだ。手が伸びる。クセのあるふんわりとした髪の感触を楽しむかのように、わたしの指は動いた。汚らしい、触るな。もっと触りたい。矛盾した意識が討論をして一瞬わたしの指は止まる。だが、ダメだった。わたしの弱い理性は彼方へ吹き飛ばされた。

……柔らかい頬、くちびる。まつげが長くてうっとりする。おいしそう、いやだ、ふれたい…ふれたくてふれたくて、たまらない、

顔が近づいた、どんどんどんどん近づいた。
唇はきっと柔らかい、千鶴、わたしの可愛い千鶴、
ぐっと、腰に何かが巻き付いて、瞬間、わたしははっと我に返った。
耳元で囁かれた低い声、

「叫ぶなよ、相川が起きる」

わたしの欲望はかき消された。昂揚した気分が急激に冷めていく不快感が心地悪く、ついでに腰に巻き付いたままの腕がうっとおしくて仕方がない。
溜息をついて、腕を軽く叩くと、簡単にそれは取れた。

「……ありがと、キサ」
「案の定、狼になりかけてたからねぇ」

にやりとキサは笑って、ぽんぽんとわたしの頭を撫でた。
手つきはこの上なく優しくて、すがりたい気分に、ちょっとだけなったけど、自分の欲に負けた決定的な瞬間を見られたことが、わたしを素直じゃ無くさせた。触るなと、さっさと逃げる。わたしの頭に着地予定だったキサの細い指と角張った関節を持つ大きな手のひらは行き場を失って、苦笑しつつ下ろされた。
わたし達はそのまま千鶴の眠ったベッドから離れて仕切りになるカーテンを引いて外に出た。といっても帰る気はさらさらない。千鶴が起きるまで保健室内にいるつもりだったわたしは、革張りの長いすに座った。

「で？あんた、タイミング良く邪魔してくれちゃって、どうしてたのよ」

「え？邪魔だった？」
「……いや、まぁ助かったけど」
あのまま、もし触れていたら。
じっとりと手のひらにまた汗が浮いてきて、嫌になる。
「なんとなく、かな、なんかクロがいっぱいいっぱいって感じだったから」
保健室に来たのは、千鶴が気分が悪いと言って、それにわたしが付き添ったからだった。抜け出した授業にまた戻る気もしなかったし、何よりもっと近くで千鶴を見ていたかった。
じっとりにじむ汗をごまかすように、手をこすり合わせた。
「ね、キサ」
大きく息を吸って、落ち着きのない心臓を落ち着かせる。
「あのね、千鶴、葉月のコト好きなんだって」
わたしは嗤いながら、ひっそりと囁くように言った。
秘密ねと教えてくれた千鶴の内緒話を、わたしは、話そうとしている。
信じたくなかった。キサに、ウソだろって笑い飛ばして欲しくて、でも、それはわたしを信じてくれた千鶴に対しての裏切りだと、心の奥が悲鳴を上げていた。
「葉月のこと、よりによって葉月のコトが」
涙なんか出ない。なんて笑い話だ。おかしくて狂ってしまい

そう。

「絶対に、好きなんか言えないわたしにね、千鶴が言うの、葉月くんが好きなのって。佳月ちゃんにそっくりな葉月くんが好きだって。佳月ちゃんのことが大好きだから、いつの間にか、葉月くんのことも好きになったのかなあって、笑うの」

葉月。わたしの、片割れ。

「千鶴は、残酷だ」

ぽろりとこぼれたわたしの心の血潮の塊が、板張りの床に跳ね返って消えた。消えた。冷たい。なんて、冷たいんだろう。

「葉月が、憎い」

低く、わたしの声は消えた。なんて濁った、醜い音。

生まれてから一度も、たぶんわたしは葉月の存在を必要だなんて思ったことはなくて、葉月だってわたしを認めてなんかいないんだ。ただの他人や、父や母よりはわたしの近くにいて、けれども千鶴とは比べるまでもなく遠い存在。

これほどまで心を強い感情で黒く塗りつぶされたことは生まれてから今まで一度もなかった。

これは、疑いようもない、嫉妬だ。

キサは何も言わなかった。ただ、黙っていた。

「ねぇ、なんでわたしは葉月じゃないんだろう」

わたしは佳月。葉月が良かった。まっさらで白く、青く瑞々

しい名前の、誰からも愛される彼に。なんで、わたしは、千鶴に

「愛してもらえないの……ッ」

好き。大好き。何回言われたかしれない。でも、千鶴が『恋』をする相手は葉月なのだ。

言わないと決めた。わたしはずっと千鶴の親友だ。それで満足だと思っていた。幸せだった、救われなくとも良かった。ああ、なのに、こんなにも渇いている。

しばらくわたしは黙っていた。キサも、なにも言わなかった。保健室の、アルコールの独特な匂いがわたしの頭を痺れさせていく。開け放たれた窓に、レモン色のあせたカーテンがゆらゆらと揺れているのさえも現実味がないことのように感じる。

「もう、壊れそう」

ぼろぼろと崩れて砂になって、空気中に溶けていく。それから千鶴の呼吸に心振るわせて、嬉々として吸い込まれていく。

そして千鶴の中に溶けていってしまいたい。

純粋で、狂気の

俺は、彼女が愛おしい。

「ね、キサ。キサは佳月のこと、好きなの」

俺はただ静かに黙って立っているキサに尋ねた。

キサはなにも言わない。そのくせ、黒々とした切れ長の目の、瞳の奥がぎらぎらとしている。試合で、キサが見せる、あの目と似てる。相手を試すような、自分を試しているかのような、もしくは全てを見逃すものかっていう、目。

傍観者。キサにはこの言葉が良く似合う。

自らが台風の目なのだというように見せる。でも、本当は違う。キサはただ小石をひとつぽちゃんと投げるだけだ。そして、渦を描き始めた水面を眺めて楽しむ。自分だけは高いところから見下ろしているのだ。もう、嵐は近いと。

でも、キサは。

佳月を、

「キサは素直だよね。俺たち兄妹とは違って。そのくせ興味のないことには目もくれないし、冷酷だけど、佳月には妙に優しいだろ。まるで自分こそが真の理解者のように振る舞って、頼らせて、どろどろに甘やかして」

宝物のように、ずっと手のひらの上に載せておくつもりなのか。

「馬鹿じゃないの」

吐き捨てた。笑いがこみ上げる。
あれを、好きだなんて。大切にしたいだなんて。
「佳月は、苦しんでいる姿が一番、可愛いんだよ」
欲望を抱え苦悶し、完璧に押し隠して、微笑んでみせる佳月は、美しい。
壊してしまいたくなるほどに。

俺と佳月は同じ日に、同じ母親の腹の中から生まれてきたそうだ。
俺も、恐らく佳月も、双子のつながりなんて感じたことなんてなかったし、どうでも良かった。俺は大人に好かれた。佳月は大人に好かれなかった。佳月は一人輪にはずれたが、それを苦には思っていないようだった。のうのうと大人の盾に守られながら、俺はそう考えた。
いつ頃だろうか、恐らく、小学校に入って少しした頃。佳月は、少しだけ頬をゆるませることが多くなった。今まではずっと無表情か仏頂面で、笑った所なんか見たことがなかったというのに。
それからしばらくして、相川千鶴の存在を知った。彼女は小学校で執拗に佳月に話しかけているらしかった。
遠目からちらりと見た佳月の表情に驚いた。
あんな顔もするんだ。
自分と似ていないようで似ている顔が、花開くように微笑む顔が忘れられなかった。
それでも俺と佳月は、誰よりも近しい、他人、だった。

違和感を感じ始めたのはいつだっただろうか。
中学入学の頃には、お互いを無視するようなこともなく、普通に接するようになっていた。
一年たち、二年たち、俺は佳月の背を越した。見下ろすとなんだか小さくて笑えた。
相川千鶴とはやっぱりいつも一緒にいた。普段はしかめっ面か無表情なくせに、彼女の前だと大人しそうで、優しそうだった。
本当に大切なのだと皮肉に思っていた。もし命の秤にかけられて、俺と相川千鶴どちらを選ぶかとなった場合、佳月は迷わず相川千鶴を取るだろう。そう考えると、何故か気分が悪かった。
ある日のことだった。寒い、冬の日だった。俺は日直の当番で放課後残っていた。まだ橙色の夕日が光っていたので、そこまで遅くはなかっただろう。
職員室から帰ってきてちょうど鞄を取りに教室へ帰る所だった。隣のクラスに人の気配がして特になにも考えず通り過ぎようとした。
誰もいない、机だけが並べられた寂しい教室の、向こう側の窓の近くに椅子に座った人影が見えた。そして、もうひとりは机に頬をくっつけて、どうやら寝ているらしい。足が止まった。座っていた人影が動く、光の加減で佳月だと分かった。じゃあ、寝ている方は相川千鶴か……そうぼんやり思った矢先、佳月が動いて、寝ている彼女の頬に、唇を寄せた……長い間離れなかった。そして、やっと上げた顔は、
なんて、綺麗なんだろう。絶望に近い、それでも後悔はしていなさそうな、頬は紅潮している、今にも泣きそうだ、満ち足りたような、幸せそうな、

やっと、理解した。

佳月に感じたいらだちも破壊衝動も、妙な優劣感も、すべて、愛

なのだと。

愛してる、触れたい。佳月の全てを自分のものだと主張したい。

壊してやりたい、俺と佳月は腐っても兄妹で、決して結ばれることはない、許されない、何より、相川千鶴に向けるような顔で佳月が俺を見てくれることはないんだろう？

俺を世界で一番憎んでくれたら良い。単純だって分かってる。だが、愛と憎悪は紙一重だという。ならば俺は、相川千鶴への愛以上の憎しみを。愛以上の憎悪で、佳月が俺を意識してくれればいい。

俺は、佳月を、愛している。

純粋で、狂気の（後書き）

たぶん、不器用なんだと思います。
彼が抱えているものが狂気なのかただ拗ねてるだけなのか、いまいちよく分かりませんが、愛と憎悪が表裏一体なら、狂気も簡単に生じちゃうのかな、と。

力量不足です、もっと、もっと彼は病んでるんです、精神的に！

従順に、享受し（前書き）

続けて、更新です。
わずかに、ボーイズラブ風味です。
そこまで、アレじゃないですが…

苦手な方はご遠慮ください。。

従順に、享受し

合わせ鏡のようだ。そのくせ映すものはまるで違う。
違うからこそ共鳴して、鈍く輝いては影を落とす。
なんて、鋭く哀しい輝きなのだろう。

「俺は、クロが好きだよ」

好きだ、愛してる。……俺には似合わなすぎてトリハダが立つ言葉だが。
しかし、この気持ちは本物だ。

「絶対に、離さない」

クロは、好きだ。きれいで、可愛いと思う。不器用だから俺が見ておかないと、ってなる。
シロは一瞬だけ、表情を無くした。ぞくぞくする、虚無を抱えた、底の見えない眼。
だが、すぐに微笑んだ。壮絶な、笑みだ。

「キサは馬鹿だね」
「あー確かに俺って、ホントに馬鹿かも。なんでお前らみたいなメンドクサイのとトモダチなんかしてんのかなー」

後悔はしてないのだけれども。
時々、思う。俺はどこか歪んだこいつら二人に人生を狂わされたのだと。

ああ、でも、もう決まっていたことなのか？だとしたら、なんて酷な人生を神様も用意しやがる。

「俺ら、トモダチだったっけ？」

シロがくすりと喉の奥で笑った。夕日に、線の細い顎が紅く照らされる。きめ細かい肌、赤く、柔らかそうな薄くもなく厚くもない唇、シロは本当に男なのかと何度疑ったことか。むしろクロよりも、女性的な魅力を持っていると思う。

「ひでー。俺はシロに出会ったときからこんなに尽くしてきたのに」

「気持ち悪いこと言わないでくれる。今俺は気分が悪い」

機嫌の悪いときのシロはたまらない。にっこり笑顔でばっさり斬りやがる。

「お前はもう、十分にクロを苦しめてきただろ」

心臓がうるさい。シロを前にするといつもこうだ、何もかも、支配された心地になる。そして、今、俺は絶対の支配者に逆らっている、手のひらがじっとりとしめっているのが分かった。

「クロは、シロと違って、不器用だから、だから、やっと手に入れた相川が本当に大切だったのに、お前は、それを奪ったんだ。これ以上、クロを苦しませる理由はどこにある？もう、十分、クロはお前を憎んでいるんだから」

千鶴、クロがその名を呼ぶときの声音がどれほど優しいか、お前だって、それを知ってて、だから、クロが憎いんだろ。

「愛されないからって、もうクロをいじめるのはやめろ」

シロは静かに微笑った。

俺の心をぐちゃぐちゃにかき乱す顔で。

俺がシロ、葉月と出会ったのは小学3年の頃だったか。

空手の地区大会かなんかだった。

俺は当時それなりに強くてジュニアの部での優勝候補だった。天狗になってたわけじゃないとは言い切れない。家が道場だから、毎日練習を重ねてたし、道場の師範である親父に厳しく指導されながらも、周囲に自慢の息子だと言っていたのに気付いてた。

自分より年上で体の大きい小学生もいたが、順調に勝ち進んでいった。　だから、まさか決勝で、自分と同じ歳の、色白で小柄な、女の子を相手にするなんて思ってなかった。

試合が始まってからも、ぼおっとしてた様な気がする、とにかく、綺麗だなと思って。

気付いたら、見事に負けてしまっていた。

戸惑うしかない俺に握手を求めて、その子はにっこりと微笑んだ。

一目惚れだった。

だが、後でその天使のように可愛いその子が男の子だと知った時は、本当に、神様ってヒドイと呆然と思ったものだ。

それから小学校を卒業するまで毎年、葉月とは決勝で再会して、俺はまぁなんとかその綺麗なその子とオトモダチになりたくて話しかけた。冷たくあしらわれはしたがだんだんと話すようにはなった。

『シロ』。俺はどうしてもそのあだ名で呼びたかった。最初の白いイメージが印象的だったからか、天使のようだと思ったからか。

『は？何それ』
『いや、だってなんかシロって感じじゃん、お前、葉月って名前で呼んだら怒るだろ』
『名字で呼べよ』
『冷たいなぁ。いいじゃん。シロで』

嫌そうな顔はしたがもうそれ以上何も言わなかったので、俺はシロと呼び続けた。
偶然同じ中学校に入学して、同じクラスになって、俺とシロは大抵一緒にいることが多くなった。
シロは外面が良くて、誰にでも優しかったが、中身は相当腹黒い奴だ。
それを知りつつ、シロと一緒にいる俺は、たぶんシロの本当を知ってて、いいようもない優越感を抱いていた。

中学3年の頃か、同じ高校を受験する事が決まってて、ある日の放課後、シロの家で勉強することになった。
冗談を言い合いながら、家に上がって、ちょうど小柄な姿が見えた。
リビングのドアへと消えようとしていたその子はこちらを振り向いた。

『今、帰ったの、遅かったね』

シロと顔立ちがよく似た、女の子。肩を滑り落ちるまっすぐな黒い髪だけがシロの色素の薄い茶髪と違っていた。

『…ただいま』
『オトモダチ？』

じっと、俺を見つめる黒い、目。シロの茶色の目とはまた違った魅力があった。

『ああ、ほら、キサ』

『……あぁ、キサ、ね。初めまして』

少しだけ微笑んだ彼女の表情が、あの日の、試合が終わった後のシロの顔と重なった。

その後も何回かシロの家に勉強するという名目で遊びに行ったが、半分はそのシロの双子の妹だという、佳月となんとかしてオトモダチになるためだった。小学生の俺が、シロとトモダチになりたかったように、俺は佳月ともトモダチになりたかった。シロは嫌な顔を隠そうともしなかったが、俺は佳月をクロと呼んだ。

『葉月はシロで、わたしはクロ？』

『なんか、こう、佳月はクロって感じなんだよな』

『…そうね、葉月はシロって感じね』

じゃあ、私はシロの反対ね、と笑った佳月の表情は葉月が決して浮かべることのない柔らかなものだった。

今思えば、シロとクロと、俺が呼んだのが、いけなかったのかもしれない。

シロもクロも名前に縛られたのか。

きっと、二人は、完全に分かれてしまったのだ。

シロと、クロ。

二つは決して、同じものにはなりえないから。
……なんて、その考えさえも俺の傲慢な独占欲だと、気付いていないわけではない。

「勘違いしないでくれる、俺は佳月を愛しているんだよ」
「…苦しむ姿を愛でるのは、まっとうな愛じゃねえよ」

シロは残酷だ。

「俺には至高の愛だね、佳月にしかこんな感情芽生えないし、佳月だけが欲しい。佳月も、佳月の涙も、心も、すべて、俺のものだよ」
「ちがう、佳月は佳月のものだ」
「相手を欲しいと思うことが、愛なんじゃないの？」

本当に不思議そうに、シロは首を傾げた。

「ねぇ、だって、キサだって、俺も、佳月も、欲しかったんでしょ」

どきりとした。
欲しい？あぁ、そうかもしれない、葉月と、佳月の危うさがたまらなく愛おしいと思ったから。
救ってやりたい、なんておこがましいかもしれないけどな、

「俺は、佳月が好きだよ」

それと同じくらい、お前の事が。

「好きだよ」

たぶん、俺は葉月が好きだ。
器用だけど佳月よりも不器用で、わざわざ孤独を選ぼうとするお前の事が。
女子共が好みそうなアレだ、アレ。
俺は、佳月も葉月も責められないな。
やっかいなことに、さ。

無邪気に、祈る。

知ってるんだ、あたし。

葉月くんが静かに笑った。キサくんはじっと哀しそうな目であたしを見る。

ふらふらぐらぐら、身体が揺れる感じがした。でも気のせいだった。

「好きだよ、佳月の事」

葉月くんはただそう言った。佳月ちゃんが決して浮かべることのない、どこか儚い笑顔。

少し息を吐いた。

「うん、知ってるよ」

知ってた。葉月くんが、佳月ちゃんのこと、本当は優しい目で見てること。冷たそうにして、でもたぶん佳月ちゃんを一番に考えてることも。

葉月くんはいつの間にか無表情になっていた。時折、佳月ちゃんがぼぉっとしているときに見せる顔とそっくりで、あたしはびっくりした。それから少し怖くなる。でも、あたしは笑ってみせた。

「葉月くんの一番は佳月ちゃんだって、あたし最初から分かってた」

分かってたの、分かってたんだけど。

佳月ちゃんはあたしの憧れ。いつも一人でいた女の子。
あたしは一目見たときに佳月ちゃんに見惚れた。恋に近いかもしれない。
真っ黒でさらさらの髪、桃色の花びらがくっつくのを嫌そうに払ってた。もう、なんかぜんぶが綺麗だと思った。
あたしが最初に、佳月ちゃんになんて語りかけたのかはもう忘れちゃった。でも毎日毎日話しかけて、くっついて、佳月ちゃんの綺麗な顔を眺めていた。
いつ頃か佳月ちゃんも本当に優しく微笑んでくれるようになって。
生まれて初めて貰った宝物みたいに、その笑顔はキラキラとあたしの心の中で輝き続けている。

佳月ちゃんに双子のお兄さんがいると知ったのは、恥ずかしながら中学校生活後半だった。それまで、全然知らなかった。佳月ちゃんは微塵もそんな事を口にしたことはないし、双子のお兄さんの影も、どこにも見当たらなかった。
葉月くん、というらしい。
初めて佳月ちゃんのお家に遊びに行ったときに初めて会った。葉月くんは佳月ちゃんのように真っ黒で綺麗な髪じゃなくって、でも雰囲気も顔立ちもすっごく似てた。
『にてるね』そう言うと、佳月ちゃんも葉月くんも一瞬黙って、似てないよと二人声を合わせて、それからむっとしたように二人とも顔を見合わせたのがなんだか可愛かった。

葉月くんのこと、好きになったのはいつだったっけ、
佳月ちゃんに似た葉月くんを見ると、なんだか胸がどきどきして、

ついには無意識に佳月ちゃんの中に葉月くんを見ようとすることもあった。
佳月ちゃんにそれを打ち明けたのは、高校に入学してからすぐ。
そう、とだけ溜息をつくように吐き出された言葉が、なんだか渇いていて、驚いた。でも、すぐにうっとりするくらい綺麗に微笑んでくれた。

「ごめんね、知ってたのに、告白したの」

葉月くんの気持ち、佳月ちゃんが好きだってこと。
恋？ちがう、葉月くんが佳月ちゃんを想う気持ちは、暖かくてふわふわした、あたしが葉月くんを想う気持ちとは似て非なるものなんだと思う。すっごく深くて暗くて冷たい深海みたいな愛なんだ。
知っていて、あたしは、あたしの気持ちを優先した。恋することって、何でこんなに自分勝手になっちゃうんだろう、って自己嫌悪。

葉月くんは何も言わない。赤い夕日を背にしているせいか、いつにも増して葉月くんは真っ黒で、そのくせ葉月くんの姿かたちの輪郭が、きらきらきらきらして見えた。
キサくんはただぼぅっとしてる。そういえば、キサくんって佳月ちゃんのこと、……葉月くんのこと、好きだったんだっけ、

沈黙が夕暮れの教室を包み込む。
あたしの心は、沈んでいるといえば沈んでいたし、晴れているといえば晴れている。胸の奥に堪っていたどろどろしたものが流れ出た感じ。

「ごめん」

葉月くんがただ呟いた。

「俺、千鶴の事ちゃんと見てなかったかも」

「そうよ、あたし、結構いろいろ考えてるんだから」

冗談っぽく言ってみると、葉月くんがちょっと笑った。

「千鶴は、何も考えていないのかと思ってた」

失礼な。だけど、そこまで気分は悪くない。

「葉月くんって、けっこう自己中心的だよね」

「そうそう、自分のことしか考えない俺様だよな」

「……キサには言われたくないんだけど？」

ちょっと納得いってない顔でじろっとキサくんを睨む葉月くんが可愛くて、思わず笑ってしまう。

良い気分。もっと、哀しい気持ちになる気がしてた。でもすっごく晴れやか。

ホントは、ね、ちょっとだけ、苦しいんだけど、

「ね、あたし、間違ってなかったのね」

そう言うと葉月くんは少しだけ辛そうな顔をした。それでもうっとりするくらい綺麗に微笑んだ。

葉月くんは佳月ちゃんの、本当のお兄さん。

でもでも、本気で、葉月くんは佳月ちゃんの事が大好きなんだって、分かってるよ。

気付いたときは必死に否定しようとしてたのも事実、少しの嫌悪感も混じってたのも本当。

でもね、思うの。

「不思議だよね」

あたしはキサくんに向かって微笑んだ。たぶん、キサくんも分かってるんじゃないかしら。

「葉月くんも佳月ちゃんも、似てないようで似ているの」

相手を想う気持ちは、自由だっていうのが、あたしの持論だけど、世間的に許されない戒めもあって。誰かを傷つけてまで想いを遂げるのが正しいとも思わないし。……って、あたしが言えることじゃあないけどね。

許されない？普通じゃないこと？普通じゃないからって、きっととっさに否定しちゃうんだ。あたしが瞬間的に感じたあのどろどろした嫌悪。

怖かった。佳月ちゃんも葉月くんも大切な存在なのに、二人に対して、そういう感情を抱いてしまったことが。

でも。

「葉月くんの気持ちは否定したくない」

血は、繋がる赤いものはきっと葉月くんを縛るんだろうね。

あたしは願うよ。いつかきっと、葉月くんと佳月ちゃんが、お互いを憎み合うのでなく、分かり合える日が来ること。

葉月くんがちょっとだけ素直になって、佳月ちゃんも、広い世界に目を向けてくれますように。

だって、二人とも大好きだから。

願いが叶うためなら、あたし、なんでもする。
ずるくなるし、嘘だってついちゃうよ。
二人とも、大好きなの。愛しているの。

無邪気に、祈る。（後書き）

もう一気に更新します。

あともう少し、お付き合いくださいませ。

Good－bye My Sweetheart. And…

あなたは、最期に、何を想ったのかしら。

雨が降っていた。お線香の匂い、灰色、黒、そんなものしかこの場に許されていなかった。

わたしはじっとしていた。

皆が皆、わたしを見ては首を傾げて、お辞儀をしていく。

千鶴の両親は、彼女が高校を卒業してすぐ、揃って事故で亡くなられたし、他に親戚もいなかった。

わたしは黙って礼を返した。参列者の大半は高校時代の同級生や通っていた大学関係の人で、わたしが知っているひともいれば、知らないひともいた。

ただの友人であるというわたしが葬儀の喪主を務めるに当たって、千鶴の大学での知り合いは不思議そうにしていた。

わたしと千鶴は、ただの友人だ。

でも、ただ、という言葉で終わらせたくないのは、わたしだけだったろうか。

写真の中の千鶴は花が開いたような笑顔で額の中に納まっている。

涙がこぼれて止まらない。

うつむいたわたしを気遣う声が聞こえてはいたが、それらに答えることはできなかった。

千鶴は逝ったのだ。

彼女が本当に愛した人に、看取られることなく。

肩に掛かる手を振り払った。

「佳月」

今は、その手にすがりたくなかった。

「なぁ、馬鹿なこと、考えんじゃねぇぞ」

「……馬鹿なことって、どんなこと」

「とぼけんな」

キサはわたしの前で膝をついてわたしの髪をぐしゃぐしゃにした。

「……そんな風に泣くな」

「……」

「……お前、気付いてるか、さっきから涙垂れ流しでひでー顔だぞ。頼むから、ちづちゃんの後についていったりするなよ」

肩を軽く叩く手は止まない。

キサの労わる仕草と声に、凍りついた心が少しずつ解れていきそうになる。

あぁ、わたし、また、甘えてる。

……嫌だ。

「わたし、今、あんたに頼りたくない」

あんたは、何が何でも奴の味方だろうから。

「殺してやりたいわ」

高校生の頃は、よく呟いていた言葉。

千鶴が奴の話をするとき、千鶴が奴の隣でにこにこ微笑んでいるとき、冗談を言うみたいにこの一言を呟いて、荒ぶる心を鎮めていた気がする。
今ほど、こんなに殺意がわき上がったことはない。
もし今、目の前に奴が現れたのなら、絞め殺してずたずたに切り裂いてやる自信がある。

キサは溜息をついたようだった。
と、赤ん坊がぐずる声がする。

「ほら、お前がそんな物騒なこと言うから、起きちゃっただろ。せっかく寝てたのに」

壊れ物でも扱うかのように、キサはそっと赤ん坊を抱え上げた。
おおよしよしとなだめつつ、ほら、とキサはうつむく私の視界にその子を見せた。

小さな顔。白く丸いほっぺた。鼻の頭は赤い。
いとおしさよりも先に、恐怖が私を凍らせた。

「な、コイツ見ても、まだ死にたいって思うか？」

初めて、まじまじと見た気がする、その顔、に、危惧していた通り、千鶴の笑顔が、重なった。

「……死にたい、なんて、一言も言ってないよ…」

キサからその子を受け取って、ゆっくりとその軽いような重い身体を抱きしめる。命の重みだ。千鶴が産み落とした子供は、今、何も知らずにすやすやと眠っている。

だって千鶴は最期、微笑んでいた。細い手首を伸ばしてわたしの手を、小さな手のひらで握りしめて。

あのこを、そだてて。
かづきちゃんだから、まかせられるんだよ。
ねぇ、よろしくね。

彼女の言葉は、呪いに等しかった。
きっと千鶴は、そんなこと微塵も考えてはいないだろうけど。

……千鶴は残酷だ。
わたしの気持ちを置き去りにして、先に逝って。
貴女にそっくりなこの子を、勝手に託して。

貴女は知らないでしょう。
貴女が大好き。
愛してる、愛してる、愛してる、……

貴女が死んだら、この世にいる意味がないってずっと思ってたのに。

キサがぽんぽんとわたしの頭を撫でた。

千鶴が残していってくれた赤ちゃんを抱きしめて。
わたしは、いつの間にやら、声を上げて泣いていた。

生まれて初めて、大声で、泣いた。

その幸福な結末は。（前書き）

完結です。
そして長いです……良い所で切れなかったのです。。
では、お楽しみいただけると、幸いです。

その幸福な結末は。

「……で、静流ちゃんがいるわけ」

ぽんぽんとその小さな丸い頭を軽く叩くように撫でた。ふわふわとしたその髪は結ばれることなく肩に滑り落ちている。光に透かすと茶色混じりの細い髪はキラキラと金色に瞬いてまぶしくて貴咲は目を細めた。

まだ小学校に入ったばかりの女の子にはよく分からなかったようでしきりに首を傾げている。

「ええと、おかぁさんはしずるのほんとーのおかぁさんがだいすきで、でもほんとーのおかぁさんはしずるが生まれてすぐしんじゃって??」

しんじゃって?と繰り返す静流にはまだ、死ぬということの本当の意味が分からないのだろう。だよなぁと貴咲は思う。だってこんなに小さい。しかも静流はそれこそ赤ん坊の頃から面倒を見ている貴咲の欲目を抜きにしても、天使のように愛らしい。

まだ、早かったかなぁと思った。

しかし、放っておくとこの子の養い親は何も言おうとはしないだろう。

「おかぁさんは、ほんとーのおかぁさん?あれ、じゃぁしずるにはおかぁさんがふたりいるの?」

混乱したかのようにこてんと首をたおしたかと思えば、がしりと貴咲の襟首を掴んで揺さぶった。丸い大きな瞳はきらきらと輝いている。

「ねぇ、それってとってもすてきなこと？」

すてきなこと、なのだろうか、静流にとって。貴咲にはまだ分からないが、幼い静流が今現在彼女なりの解釈の仕方で素敵なことだと感じたのなら、それはそれでいいのではないだろうか。

「ねぇキサおじちゃん、どうなの？」

「まだおじちゃんじゃねー」

よっとかけ声を軽く上げて立ち上がるとその小さな身体を抱き上げた。嬉しそうにきゃあと笑って首に巻き付いてくる小さな腕を軽く叩きながら貴咲はにやっと笑ってみせる。

「そうだな、おかぁさんふたりもいるんだな」

「おとぉさんも、ふたりいるもん」

ふたり、貴咲はちょっと沈黙してから、軽く唸った。

「ええと、それは、さ」

「はづきおにぃちゃんと、キサおじちゃん」

「……同い年だって」

なんで自分はおじちゃんでアイツはお兄ちゃんなのか。納得がいかん、…ちょっと落ち込む。

というかそれでいいのか。いいのだろうか。自分は、まぁ嬉しくないこともない。こんなに可愛い娘のような存在から父と慕われるのは、やぶさかではない。

だがあの偏屈なキョーダイはどう思うだろうか。ただでさえいまだに佳月は葉月と会うとまずきつく睨んで、存在を無視する節があ

る。こうやって静流が葉月をおにぃちゃんと慕うのも、全て貴咲が仕組んだことだ。

「……でも、おかぁさん、はづきおにぃちゃんのこと、キライだって」

「……それ、おかぁさんが言ったの」

静流は貴咲の首にぎゅっとしがみつきながら小さく首を振った。

「…たぶん、そうだろうなぁって思ってたの。そしたら、このまえ、べにちゃんとあおくんもね、そう言ったの。ふたりも、葉月おにぃちゃんのこと、好きじゃないんだって。あと、……キサおじちゃんも好きじゃないってゆってた、でも、しずるはふたりともだいすきだよ」

貴咲は苦笑するしかない。静流の言うベニちゃんとアオくん、紅と碧という近所に住む双子の姉弟は思っていた以上にクセモノらしい。

なんせ静流が父のように慕っている自分にも、先日冷たく鋭い刃のような視線で睨んできたのである。

完っ璧に静流に惚れてるなあの双子。まあ当然だけど、俺の静流は本当に可愛いから！

思わず顔がにやけた貴咲は静流の小さな身体を抱えなおして、高い高いをしたあと頬ずりまでしてしまった。きゃーと歓声を上げる静流のあたたかな身体を抱きしめる。

玄関の方から音がした。何かを言い争う声に静流があっと満面の笑みを浮かべた。苦笑して貴咲が静流を下ろしてやると、たたたたたっと駆けていく。

「……だっから、あんたのそういうところが」

「おかぁさんっ」

リビングの扉を開けた人物の足下に静流は真っ先にしがみつく。

「ただいま静流」

先程とはうって変わった優しげな声で彼女は愛娘を抱き上げた。

「はづきおにぃちゃんもおかえりなさいっ」

「ただいま」

後ろから現れた彼もまた微笑んで小さな静流の頭を撫でた。

静流に気付かれないようにしっかりと葉月を睨み付けた後、佳月はぎゅーっと効果音がつきそうな勢いで愛娘を抱きしめた。

静流はきゃーっと歓声を上げながら佳月の首にしがみつく。

「ねえ、きょうのばんごはん、なあに？」

「静流は、何が良い？」

「えっとねぇ、スペシャルオムライスっ！ケチャップじゃなくて…、ええと、ええっと」

「デミグラスソースね？」

「それっそれ食べたいっ」

持っていたビニール袋を当然のように葉月に押しつけながら佳月は静流を抱えたままさっさと中に入っていく。留守番を頼まれていた貴咲には一言もない。

「……ま、別にいいけどね、ふん……」

「何言ってんの、キサ」

葉月はまるまる膨らんだ3つのビニール袋を特に苦にした風もなく持ち、佳月の後に続く。
持とうか、と貴咲は手を差し出したがすげなく断られた。佳月に押しつけられたというのが嬉しいに違いない。
けっこう健気な奴だよなぁとキサは心の中で微笑んだ。
昔はもっと根っこの部分が陰険で容赦のない奴だったハズなんだが。静流効果だろうか。
認めはしないだろうが、葉月は静流を可愛がっている。
佳月が母親役で、自分は父親役というのを気に入っているのかもしれない。
可愛い奴だなぁと貴咲はにやけた。

「ねえねえっはづきおにぃちゃんとキサおじちゃんもいっしょにごはんたべるでしょー？」
「……確か、仕事があるんじゃなかったかしら」
「えーっ」
「ううん、仕事は休み。お母さんが許してくれるなら、俺は静流とお母さんと一緒に食べたいな」
「わーいっ！おかぁさん、良いでしょっはづきおにぃちゃん、おかぁさんのスペシャルオムライス、食べたことある？？」
「ないよ、楽しみだなぁ」
「……」

ハンバーグもつくんだよ、すっごくおいしいんだよっ静流のはしゃぐ声と葉月の穏やかな声に貴咲は耳を澄ませる。いつまでもこっそり聞いていたい気もするが、そろそろ佳月の精神がぷっつんとなるだろう、俺もスペシャルオムライスとやらを食べてみたいし、さて、なだめに行きますかね。

「佳月、手伝おうか？」

「……米を研いでくれない」
「りょーかい」
貴咲はこっそりと佳月の横顔を盗み見た。思ったよりイライラしていない様子。
進歩かなぁと貴咲は嬉しく思った。

『あのね、キサくん、お腹の子供は、葉月くんの子供じゃないの』
静流が産まれる前の日、開いた窓からやって来たそよ風に髪をわずかに揺らしながら、千鶴は内緒話をするように声を小さくして貴咲にそう告げた。
驚いて声を失った貴咲に、千鶴はくすぐったそうに笑った。
『実は、卒業式の日に、葉月くんに振られてるの。この子の父親は別の人』
『……そう、だったんだ、』
『ふふ、キサくん、変な顔してる』

何と言っていいか、分からなかった。今まで絶対だと信じていた真理が覆されたような、そんな世紀の驚きに直面した感じ、大げさすぎるがまさに貴咲はそんな気分だった。

いつまでも、続くと思っていた。葉月は佳月に身を焦がし、佳月は千鶴を渇望し、千鶴は葉月と佳月を想いながら、葉月に恋心を抱き続ける。貴咲はそんな三人を眺めながら、相談役として奔走して、そんな関係が一生定着して、変わらないと信じ切っていた。

『……ごめん、なんて言ったらいいか』
『……キサくん、変わらないことなんてないよ』

何もかも見透かしたような千鶴の言葉に、貴咲は脱力し、ベッド近くの椅子の背もたれに身を預けた。

『……結局、ちづちゃんが一番オトナだよなぁ』
『やだ、キサくん何言ってるの』

千鶴は声を上げて笑う。

『……葉月くんにね、振られる時、付き合ってるフリしない？って言われたの』

黙っててゴメンね。千鶴はまるまると膨らんだお腹に手をやりながら言葉を続けた。

『たぶん、一番最初にオトナになったのは葉月くんだよ。葉月くん、何だかんだ言ってて、あたしには一回も手を出さなかったし、ちゅー止まりだもん。それも佳月ちゃんに見せつける用。正直振られてすっきりしたわ』
『……自称親友として謝っとく。ゴメンネ』
『もう、本当よ。何なの、すっかり青春を無駄にしたわ』

ぷんぷん怒る真似をしつつも本当に憤慨しているのではないと分かったから、貴咲は俺もだよ、と笑った。楽しかったな、そう言うと、そーだね、と笑った。

『私もキサくんと一緒。ずっとあのままでいたかった。葉月くんに恋をして、佳月ちゃんと親友で、……佳月ちゃんの気持ちに

気付かないふりをして』

貴咲はひやっとした。千鶴は貴咲をじっと見つめている。口元に笑みを浮かべながら。

『私、ずるいの。ぜんぶ知ってるの。キサくんと私だけの秘密ね』

『……ちづちゃんには本当に驚かされるよ』

『む。だって、佳月ちゃんと葉月くんを見守る会の会員でしょ。キサくんには副会長を任じます。会長の座は譲れないわ』

『いや、俺も会長は譲れないけど。二人とも愛しちゃってるから』

『我慢しなさい。とっておきの秘密をもうひとつ教えてあげるから』

真剣な表情を作ったような顔をしてちょいちょいと貴咲を手招きして、顔を寄せた貴咲の耳元に千鶴は唇を寄せた。

告げられた秘密に、本日数度目の驚きで心臓が止まるかと思った。

『ね、びっくりでしょ、会員特典です。私がキサくんにしゃべったこと、葉月くんには内緒ね、付き合ってるフリも、ぜ～んぶ葉月くんの計画のうちよ』

覚悟を決めたのね、千鶴は面白そうに笑う。

それから、あたしの分まで佳月ちゃんの味方をしてね、と続ける。

『あたし、たぶんこの子を産んですぐに死ぬわ』

『……おいおい、縁起でもねぇこと言うなよ』

『確信してるの。だから、この子を授かったのかしら、って』

手のひらを祈るように組み合わせて、膨らんだお腹の上に乗せる。千鶴は貴咲を見ようとしなかった。寂しそうな表情で微笑む。

『歪んだ関係は終わりよ。変わらないものはない。でも、良い形での永遠なら信じたいわ、あたし、ずるい女だから。この子が、静流ちゃんが、全てを変えてくれるって、信じてる』

何も言えなくなってしまった貴咲を見つめ、にやりとでも効果音がつきそうな千鶴にしては珍しい笑みを浮かべた。

『キサくんには知っておいて欲しかったの。葉月くんも佳月ちゃんも手に入らなくて残念だったね？』

『……めっちゃ憎たらしいわちづちゃん……』

『ふふ、副会長の役目はちゃんと果たすことね』

期待してるわよ。

そう微笑った千鶴の顔は全てがうまくいった未来を想像しているようで、どこまでも幸せそうだった。

ちづちゃん、君の想ったとおりの未来になるかもしれないよ、と貴咲は心の中で微笑う。

まだ葉月は行動を移している様子はないけれど、そのうちきっと君の想うとおりになるだろう。ちょっと、いやかなり、悔しいけど。

ちづちゃんの言う、良い形での永遠が結末になるように、俺は俺なりに副会長としての役目をまっとうするよ。

タマネギのみじん切りで目の端に涙がにじんだ。決して片思いの終わりの予感に涙したわけじゃない。

インターホンが鳴ったので、佳月がデミグラスソース作りの作業を止めて火を見とけ、と貴咲に命じ、玄関へと向かう。

「えーっおっさんたち、また来てるの」
「紅、失礼だよ。こんにちは、葉月さん、キサさん」
「あーーっべにちゃん、あおくん、こんにちはっ。あのねっあのねっ、しずる、きょう、はづきおにぃちゃんとキサおじちゃんと、いっしょにごはんたべるんだよっ」
「ふうん、嬉しそうだね」
「佳月さぁん、お父さんとお母さんデートなの、あたしたちもお邪魔して良いよねっ」

葉月は苦笑して、自分の膝に乗っていた静流を下ろし、敵意に満ちた視線で睨み付けてくる双子を余裕でかわして、静流を任せた。当然のように双子は静流の隣に陣取り、静流を喜ばせようと持ってきたカバンからおもちゃやら絵本やらを取り出し始めた。静流は嬉しそうにきゃらきゃら笑っている。

「……なんというか、末恐ろしい双子ちゃんだよな」
「そう？まぁ、簡単には静流はお嫁に行かせないけど」

さりげなく親ばか発言をした葉月は、代われと言わんばかりに貴咲の持つ包丁を取り上げてにんじんを刻み始める。隣で佳月は嫌そうな顔をしたが、何も言わずに鍋の中で木べらをぐるぐる回した。
馬に蹴られるより葉月に足蹴にされたくない貴咲はさっさと退散する。

ダイニングテーブルに腰を落ち着かせ、自前の焼酎を自分用のコップに注いで、キッチンに立つ大人も、ソファに座る子供たちも邪魔しないように、ひとり、幸福な未来に乾杯した。

その幸福な結末は。（後書き）

とある健全で不健全な恋愛事情とその幸福な結末。
いかかでしたでしょうか。
私の力量不足で、不愉快な気分を持たれた方もいるのではないでしょうか…ただただ土下座して謝ります、すみません……。。

まず、つけたタグがほぼこの話とズレていた件について。。
勢いって怖いですねっ
今度からは考えてタグをつけたいと思います。。
そして、タイトル。
長いうえに、意味不明という。。
「健全と不健全、」は語呂が良いのと、４人を表していたりしないかしら～と思ったので。そして「幸福な結末」。結末、として良かったのだろうか、いまだによく分かりません。千鶴ちゃんが幸福な結末を望んでいたので、タイトルに入れました。

それぞれの人物の想いや回想などで話は進んだのですが、状況描写が少なすぎて、よく分かりませんでしたよね……あえて描かなかった部分もあるのですが、明らかな力量不足です。

実は、静流ちゃんとあおくんは、別に思いついた話の登場人物でした。そこからふとなぜか千鶴ちゃんと静流ちゃんがつながり、こんな感じになりました。

千鶴ちゃんとキサくんの内緒話、ここでは言いませんが、とりあえずこれから佳月さんは葉月さんに虎視眈眈と狙われると思います。

長々と反省文、失礼しました。
ここまで読んでくださり、本当にありがとうございました。
メリィ山田

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8995t/

とある健全で不健全な恋愛事情とその幸福な結末。

2011年6月13日13時56分発行